

初期真宗の衆生論

京都女子大学 黒田義道

本発表では、親鸞の衆生論を確かめた上で、次の視点をもって初期真宗の衆生論を考察したい。一つに個々の行者と他の衆生との関わりを明らかにすること、二つに衆生について言及する際の視点を示すことである。これらの作業を通して、初期真宗における衆生論について、親鸞からの継承・展開を明らかにすることを目的とする。

本発表で取り上げる初期真宗とは、親鸞の直弟たち、さらには覚如・存覚としておきたい。彼らには、程度の差はあるが、著書など一定の文献が残されている。それらを考察の対象とする。

まず、個々の行者と他の衆生との関わりについて、意図を説明したい。

親鸞は自らの往生成仏を求めた人物である。阿弥陀仏は本願において、「十方衆生」の救いを示している。親鸞はこの本願を、「親鸞一人がためなりけり」(『歎異抄』、『浄土真宗聖典全書』二卷一〇七四頁)と受けとめた。親鸞の教義の基本的な枠組みは、阿弥陀仏と親鸞を含む個々の行者との関係を論ずることが中心である。

一方で親鸞は、このような阿弥陀仏の救いを、「誓願一仏乗」(『教行信証』、『浄土真宗聖典全書』二卷五四頁)と示して、この教えを大乘仏教の帰結と位置づけている。阿弥陀仏の救いは、親鸞一人が仏に成る道であると同時に、他の衆生と共に仏に成る道であったとも言える。

このように、親鸞の教義は個の救いに重点があるが、それだけには留まっているわけではない。機の深信を述べる際には、煩惱に覆われて清浄な心を持たない者を自己に限ることなく、「一切群生海」「微塵界有情」(『教行信証』、『浄土真宗聖典全書』二卷五四頁、八二頁、八七頁)と広く受けとめている。さらに『唯信鈔文意』では、阿弥陀仏によって「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」(『浄土真宗聖典全書』二卷六九九頁)が救われていくことを示している。こうした「一人」と「われら」との関係を明らかにすることが第一の視点である。

こうした親鸞の理解について、門弟たちがどのように理解していたのか明らかにしたい。これに加え、戒についても言及したい。肉食について検討するためである。

次に親鸞やその門弟たちが衆生について言及する視点の考察である。衆生に関する言及を彼らの著作の中から取り上げ、その言及の背景にどのような視点や背景があるのか考えたい。

親鸞やその門弟たちが活躍した時期は、いまだ現在のような宗派意識は存在していない。親鸞の弟子たちに共有されていた意識は、法然によって明らかにされた選択本願の教えを親鸞を通して受けとめているのだというものである。法然の教義について多様な理解が行われていたことは知られており、親鸞の弟子たちが親鸞とは異なる流れの理解に触れることもあったものと考えられる。こうした時代背景にも考慮しながら、考察を進めたい。

キーワード 機の深信 個の救い われら